

武蔵野日曜講筵 復活節

復活の生命

——ルカ伝第23章39～43節——

1979年4月15日

小池辰雄

神との関係が切れているのを罪という 信愛関係 人類を二つに分ける分け方 無者キリスト
パウロの開眼 逆転 与えられる義 出現世 霊体をもって現れた 十字架の門を通って甦り
の生命の中に入る 私の中にキリストは生きてごらん

【ルカ23・39～43】

39 十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏りて言う『なんじはキリストならずや、己と我らとを救え』40 他の者これに答え禁めて言う『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか。41 我らは為しし事の報を受くるなれば当然なり。然れど此の人は何の不善をも為さざりき』42 また言う『イエスよ、御国に入り給うとき、我を憶えたまえ』43 イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし』

【ルカ9・28～31】

28 これらの言をいい給いしのち八日ばかり過ぎて、ペテロ、ヨハネ、ヤコブを率きつれ、祈らんとて山に登り給う。29 かくて祈り給うほどに、御顔の状かわり、其の衣白くなりて輝けり。30 視よ、二人の人ありてイエスと共に語る。これはモーセとエリヤとにて、31 栄光のうちに現れ、イエスのエルサレムにて遂げんとする逝去のことを言いたるなり。

●神との関係が切れているのを罪という

「モーセ、エリヤ」は何百年も前の人間だ。それが現れてきた。天界で生きているからね。モーセはイスラエル宗教の土台をつくった人です。出エジプトをやった人。もちろん、神さまの力だよ。エリヤは中興の祖で、イスラエルが信仰的な危機のときに独り立って、

「エホバの信仰に立ち返れ」

と、もろもろの偶像を拜んでいる連中に対して、偽りの預言者たちに対して独りで戦って、彼は勝った。霊的に勝利した。このモーセとエリヤが現れた。

31 栄光のうちに現れ、イエスのエルサレムにて遂げんとする逝去のことを言
いたるなり。



復活節は今年で、集会を始めてから39回目ですかね。ルカ伝24章というところは、キリストの復活を伝えている一番詳しいところですよ。しかしながら、復活はもちろん死という前提があったわけですよ。キリストの死は普通の死とは違う。十字架の死ですから。キリスト教会の会堂に——ここにもテーブルの前に十字架の印がありますが——キリスト教といえば、もう十字架がその印であるとされるわけですよ。新しい方もいらつしやるので、いろいろなことをお話しておきます。

旧約の宗教は、疵なき当歳の小羊を神の前に犠牲として献げて、そして、一年間の罪を帳消しにしてしまう。それを「贖い」という。罪の贖いです。そういうことを大祭司が年に一回、神殿でやる。そういう宗教なんです、ユダヤ人の宗教は。旧約、旧き約束です。血によって贖われるというわけですよ。日本人の仏教的な思想とはだいぶ違う。砂漠の宗教ですから。罪の贖いということ。「罪」というのは、何か悪いことをしたとか、悪いことを思ったとか、そんなのはただ罪の枝葉にすぎない。「罪」というのは、神さまとの関係が切れているのを「罪」という。これは普通は、罪の意識が弱いですから。神との関係が切れてしまっている。これが罪なんです。

即ち、「民主主義」なんていうでしょ。本当は、民主の奥に神主、神が主であるということとを忘れてる。神主を忘れて、民主なんてやってるいわゆる民主主義ではダメですよ。民主主義は、それ自身には或る真理性はもちろんあります。けれども、それは限定された相対的な真理性にすぎない。神という——仏教なら「如来」でもいい。とにかく、絶対者です——絶対者との関係が切れたら、本当は「霊止」ではない。これは私はD中学高校の生徒にもはっきり言っている。

「人間は本当は霊止、霊が止まると書く。これだけは忘れるな。神霊がとどまっている。神霊がその存在の中にとどまっているのが本当の霊止で、止まっていない人が一杯いるようだが、君たちはそれではダメだ。今に、そのことを本当に身につけてもらいたい」

と、私は言ったわけですよ。もう、D中学高校からサヨナラしましたが、しょうがない。外野で言いますから。先程、司会者が私の本を読んで、非常に集会と同じ気持ちになると言われたが、そういう気持ちで私はどんな頁も決していい加減に書いてません。無駄な書き方を私はできないんです。D中学高校の生徒に『この道を往く』という小冊子を渡しました、私がいる限りは。あれは福音の角度からはっきり書いています。

霊止ということ。霊止でないのが罪なんです。神との交わりが切れてしまっているのを「罪」という。これははっきりしてくださいよ。

「キリスト教」

という、

「ああ、キリスト教か」



なんてなわけで、始めから毛嫌いする人がある。ここではそんな意味でキリスト教を言っているのではない。本当の人間とはどういうことかということ語っている。

●信愛関係

神は歴史的にイスラエルの民に、ヤーヴェーの神として、エホバの神として現れた。名前は学問的には

「ヤーヴェー」

という名前だったと結論されているわけですが、

「エホバ」

という読み違いがまた面白い。「わが主」「アドナイ」という言葉と「ヤーヴェー」という言葉と一緒にすると、「エホバ」という発音になる。子音と母音が一緒になってしまふ。「エホバ」でも「ヤーヴェー」でもいい。とにかく、そういう名でもって、イスラエルの民に顕れてきた神です。それは預言者たちも、またキリストも、イスラエルの単なる民族神ではないという、全世界の宇宙の神であるという自覚のもとに、この啓示の神を告白しているわけです。

キリストはその神のことを

「父よ」

と呼んでいる。人間のあいだの一番親しい縦の関係は親子の関係で父が代表ですから、ここで「父よ」と呼んだ。けれども、人間の感情の中には「母」という意識は、ある意味において非常に深いものがある。戦争で最後に断末魔に浮かんでくるのは、

「お母さんー！」

という声だそうです。

神に対してキリストはこれを「父よ」と呼んだ。旧約聖書にもイザヤ書にはそのことがはっきり言われています。要するに、親は、父母は一体の一つですから、どう呼んでもいいけれども、しかし、その代表としてはキリストは「父」と呼んだ。神さまのことを「母よ」とは言わなかった。民族神には「女神」というものがある。天照大神は女神だね。カトリックでは、マリヤを非常にキリストと並んで拝んだりするけれども。

まあ、それはちよつと余談になりましたけれども、要するに、その絶対者との——天地、宇宙、人類の創造者たる神との——関係、それをはつきり立てる。ところが、これはなかなか立てられないんだ、一時的には立てたような具合でも。それがいつも自分中心になってしまう。自分中心になってしまうというのが「罪」なんです、我執というやつが。万人は我執人なんだ。我に執している。万人は罪びとである。我執が即ち罪であるということは、神中心になれないということなんです。

それを神中心に本当に生きていたただ一人のひとがイエス・キリストであった。だから、



彼は罪びとでない。神との関係がはっきり立って、神中心に動いていることを「義」という。正義ではないですよ。よく、「正義」という訳があるけれども、ダメです、正義では。いわゆる道徳的な正義ではない。もつと深いんです、この「義」という字は。新約聖書、旧約聖書に「義」という言葉が出てきたら、本来その角度の言葉ですから。

「神を義とせよ」

というのは、

「神の意志に対して100%に然りと見え」ということ。

ということ。

「神さまの為すこと、言うことに、無条件に「はい」と見え」

ということですよ。キリストはそのようにして行かれた。日本人は本来は、私たちも明治の人間は親孝行、孝道ということをはっきり教わってきた。「忠孝の道」という。君に忠、親に孝という。「君」という言葉は、キリストに対して「君」というような言い方は聖書にあるわけです。要するに、縦の関係、孝道です。学校では師道、先生と生徒の関係。

「孝道・師道をしつかり踏め」

と、私はあれ（『わが道を往く』）にも書いてある。それが民主主義に反するならば、民主主義なんかやめろと。本当にそうです。本当の民主主義はそんなものではないはずですよ。

親子、師弟の関係、それが極限になると、神と人との関係です。信、愛、関係です。神を信ずる。神さまは人を愛する。これを「信愛」という。愛信といってもいいよ。愛は神からきている。万象を愛している。

神のそういった非常に深い広い愛を体で受けとっていたのが詩人ゲーテです。ゲーテがなぜ偉大な詩人であるかというのは、彼の魂はそういう魂であった。私は著作集第二巻の『芸術のたましい』に書きました。

その信、その愛。そういう信愛という言葉の一番深い内実は、神に対する信と、神からの愛です。愛が土台ですよ、もちろん。神の愛が土台です。土台だからあとに書いた方がよさそうだな。落ち着きがいい。それが信愛という。信愛という言葉はなるほど、愛という字を少し大きく、あるいは太く書くといいよ。それは墨で書くとき一番よくわかる。いくらでも太くなる。

「なぜ、あの信愛という字は、愛が太く書いているのでしょね」

なんて。それくらいのことやっつけてくださいよね。私は話しているうちに、そういうことになってしまふ。或は、愛というのは赤色で書いて、信は青色で書く。絶対界は青空みただいだから。

そういう土台をしつかりつかまえてから行きましょね。キリストの十字架からいろんな大事な話になってしまいましたけれども。



●人類を二つに分ける分け方

それでは、ルカ伝23章を読みましょう。

「この一回限り」

というような気持で聞いてくださいよ。私は、あなた方が頭で聞いてもらっては困るんだ。全存在で聞いて、

「やつぱり、今日は集会に来て何かしらんけれども本当の力が入ってきた」

という事で帰っていただきたい。「ある事柄が分かった」なんていうのではダメですよ。

ルカ伝23章39節、

「³⁹十字架に懸けられたる悪人の一人、

キリストの十字架の左右に悪人が磔はりつけにされていた。

イエスを譏そしりて言う『なんじはキリストならずや、己と我らとを救え』

「あんたはキリストではないですか。自分と私たちを救ってくれ、十字架からおろしてくれ」

なんてなわけだ。

⁴⁰他の者これに答え禁いましめて言う『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏おそれぬか。

こつちの十字架にかけられた盗賊はもう心が砕けている。

「私は悪かった。だから、神さまを本当に恐れかしこんでいるんだ。お前はなにこ

とだ」と。

「神を畏おそれぬか」

と、この盗賊が言ったこの言葉はいい加減にできない。私たちは、本当に神を畏れていますかね。「畏れる」とは恐こわがるではないですよ、平伏すことです。神さまの前に本当に平伏さない魂はダメなんです。

人類を二つに分けると——いろんな分け方があるでしょうが——一番決定的な分け方は、神の前に平伏す魂であるかどうかということだけです。それで天国に往くか地獄に往くかに決まってしまう。そのことはこの十字架上の二人の盗賊が人類を代表しているんだ、人類の二種類を。片一方の盗賊はいつまでも傲慢である。自己中心、我執なんです。もう片一方は砕けたんです。

⁴¹我らは為しし事の報むくいを受くるなれば当然なり。

悪い事をさんざんしたから十字架にかけられても、これは仕方がないと。

然れど此の人は何の不善をも為さざりき』

「不善をも為さざりき」ところのさわぎではない。人のできないことを、至善を為したひとだよ。

⁴²また言う『イエスよ、御国に入り給うとき、我を憶おぼえたまえ』



あるいは、「御国を来らせ給うとき」なんていう訳し方もあるけれども。

「私をせめても憶えてください。悪うございました」と。

43 イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし』

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と。私は聖書の中で一番好きな句のひとつです。毎日、「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」と言っていてごらん下さい。

その「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」という資格は何かというと、平伏しの魂であるということです。何か善いことをしたとか何とかということではない。平伏しの魂であるということ。自分を本当に何者とも思わない魂である。「無者」であるということです。

●無者キリスト

だから、私は「無者キリスト」と言う。キリスト自身が自分を何者とも思わなかったひとだから。そんなことは世界中でまだ誰も言わなかったらしいよ、キリストのことを「無者」なんて言うことは。キリストは神の子だから、これは立派な霊的な人物だと。まあ、それもそうでしょう。けれども、ある青年がキリストに

「善き先生」

と呼んだら、

「なぜ、私のことを善いというか。神さまの他に善いものがあるか」

と言われた。世界中の、あるいは日本中の学校の先生が果たしてそれだけのことをはつきり言えるか。何か自分を何者かと思っている。そこには本当の力は来ない。相対的な力はあるでしょう。だけれども、絶対的な力は来ないんです。

ところが、自分を本当に何者ともしないで、もう平伏して「父よ」と言っているキリストは、

「我と父とは一つなり」

と言う。全く一つだと。これは全く自分を何者ともしていない。

「ゼロ＝無限大」(0＝∞)

であるということです。「ゼロ＝無限大」、そういう数学は成り立たないでしょう。しかし、霊的数学は成り立つんだ。私はたまらんです、キリストというひとを見てみると。

どうぞ、あなた方、本当に福音書に食いついてくださいよ。「分かるの、分からないの」なんて、そんな本ではないですから。

「参りした！ 主さまー！」

と言って、自分をキリストの中に投げかけてごらん。驚くべき力がくるから。病なんかどこかへ逃げてしまうから。

「今日は少し風邪気味だ」



なんて言ったって、来ればいいんだよ、ここへ。治ってしまうんだよ、そんなものは。それだけの、私は集会をしているんです。お説教なんかかしているのではない。

その無者に、私たちは瞬間的にはなるかもしれない。けれども、本当に本質的にはなかなかない。それだから、キリストが、

「そのお前の罪を私は全部この十字架で背負った」

と言う。これが「羔の贖い」なんです。キリストのことを「羔」と言うのはその意味なんです。黙示録で書いてある。「羔の婚姻」という。

●パウロの開眼

キリストに逆らって、キリストを信ずる者を迫害していたパウロは、キリストの本当の信者ステパノを石で撃つことをよしとした殺人犯だよ。ステパノは石に撃たれて息を引きとりながら、

「彼らを救^{ゆる}してやってください」

と祈っていた。パウロが回心する無意識の根底をなしているのはステパノの死です。ステパノの殉教の死です。なお、パウロは意気揚々として迫害していた。とうとう、ダマスコ途上でキリストにひっくり返された。復活のキリストが現れた。

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか！」

と。ぶつ倒された。霊撃されてしまった。パウロはひっくり返されてしまって、目が見えず、ものが言えず、耳が聞こえず、食がとれず、約三日間。アナニヤという預言者に示しがきた。

「あれがお前のところに来るから、^{あんしゅ}按手してやれ」

と。アナニヤの按手によって、

「わが眼より鱗^{うろこ}の如きもの落ちたり」

と、パウロは開眼しました。

「俺はまちがっていた、とんでもないことをした」

と。それから、パウロはキリストの弟子に完全になりきました。

「われキリストと偕に十字架せられたり。我もはや生くるにあらず、キリスト

わがうちに在りて生き給うなり」

と。それで、彼の大伝道が始まったでしょ。

復活のキリストの力ですよ。パウロが本当に動きだしたのは。今日は「復活の生命」と私は書いたけれども、驚くべき力、生命。相対的死なんていうのは乗り越えている生命です。今のキリスト教があるいは仏教が、なぜ力がないかというところ、本当に如来の霊を受けてない、本当にキリストの霊を受けてないからです。

私は「キリスト教学会」にも属しています。こないだ、「組織神学会」にも行ってきました。ただ一つを欠く。聖霊がない。「について」は論ずるよ。しかし、「中から」告白はしない。



だからダメ。頭で「について」論ずることはいくらでもできるよ。答えは百点満点をとるようなものを書けるよ。ダメです。神さまの目には、その答えはダメなんです。空しいんです。何も言わなくても、その人自身が本当にキリストのこの甦りの生命を受けとっているならば、白紙でもそれは百点満点、千点満点です。そういうようなわけです。

パウロはキリストの十字架でもってはっきり自分の贖いを受けとって、

「私は悪かった、とんでもないまちがいだった」

と。パウロは復活のキリストによつて逆転されました。「逆転」という言葉を私は急に使いたくなった。逆転した。

太陽は地球の周囲を回っているように見える。それはそうじゃない。地球は自転しながら太陽の周囲を回っているんだというのがコペルニクスの地動説ということですよ。天動から地動にひっくり返った。ダンテが『神曲』を書いていた頃はまだ天動だ。地球が中心だ。けれども、太陽の周囲を地球が回転している。これが逆転なんです。関係の逆転なんです。主客の逆転。こつちが主ではなかった。太陽が主だった。

朝、お天道さんを見て合掌して拝む人がある。いいよ、そういう姿は。日蓮が太平洋から昇ってくる朝日を見て、「南無妙法蓮華経」の第一声を放ったでしょ。日蓮というやつはとにかく日を自分の中に宿しているような男ですよ。日本人は日を国旗として、その意味においては、日蓮精神にならなければダメです。私は日蓮さんを、坊さんとしてはやはり第一級の人だともちろん思っています。ただ、他宗を排撃したのはちよつとくまなくない。他の、道元であろうと、禅宗であろうと、浄土宗であろうと、浄土真宗であろうと、それぞれみんな驚くべき世界をもっている。言い方が違う、告白の仕方が違うと言って、それを

「あれはどうだ。法華経だけが」

というような言い方をすると、これはちよつと日蓮さんは——その限りでは間違っていないかったけれども——他宗を排撃したことにおいては、惜しかったなと思う。

●逆転

パウロはそういう逆転をしました。こないだお話しした、アッシジのフランシス。フランシスも始めは自我的な愛で動いていた。それが今度は、キリストの愛に変質逆転してしまつた。感情の面でも逆転する。パウロは意志の男で、自我意志の強いやつだから、今度は、

「キリストさま。あなたの意志で、私の意志ではありません」

ということになった。パウロは自分を誇りたがるやつだった。そして今度はキリストを誇りだした。

「私なんかはもう塵芥だ」
ちりあくた

と言いだした。これが逆転。意志の逆転です。自然科学の世界では、天動説が地動説に逆転した。意識でもそうですよ。



カントはどうしたんですか。カントの認識論。これは経験からくるのではない。人間の先験的な法則によってものを認識するんだと。これは純粋理性批判でもって、やつぱり認識の上の逆転をやっているんです、哲学の上で。知の上で。知情意みんなこれが逆転しなければ本ものにならない。今日は「逆転」という題でもいいくらいだ。皆さんも逆転してくださいよ。

だから、日本の国旗は——なにも私は国粹を言っているのではない——世界に冠たるものなんだ。

「静かな偉大さ、崇高なる単純さ」

という、この太陽というのは。内村鑑三先生はそういう非常に幼児の魂です。日が沈むと、

「太陽よ、さよなら」

と挨拶するような人です。

いわゆる大人に成りあがったようなやつは嫌いだよ、僕は。妙な言い方をするけれども。ダメです、成りあがりは。ゲーテが言いました、

「真に生成して展開してやまざる人であれ。成ってしまった男はダメだ」

と。

「ゲヴォルデン」(成りあがったもの)

というのはもう完了してお終いなんだ、動かない。

「ヴェルデン」(成りつつあるもの)

というのはグングン展開してやまない。限りなく展開してやまない。限りなく展開してやまないのは——いわゆる理想主義ではないですよ、福音の世界は——これは自分の中に或る一つの限りなきものが来ているから、限りなく展開する。何ですかね、この限りなきものとは。

●与えられる義

そういうことで、十字架の土台がわかりましたね。相対的自分なんてものを問題にしたなら、いつまでたってもダメですよ、こんなものを問題にするのは。百年河清を俟^まつが如しという。キリストは私を、あなた方一人ひとりを、贖^あつてしまった。だから、そこにはもう罪がない。相対的な罪びとではありますよ、死に至るまで。けれども、贖^あわれたる者はもはや、キリストの神さまとの深い関係、義をいただいている。

「信仰によって義とされる」

とはそのことなんです、キリストの福音を本当に受けとれば。これはプロテスタントの命題だよな。「信仰によって義とされる」と、さんざん私は無教会で聞かされた。

「義人は信仰によって生くる」

という。「義人は信仰によって生くる」のではない。



「信仰によって生くる人が義人だ」

というんです。あれは間違えては困る。パウロはそういう言い方をしているけれども、ところで、その十字架上のキリストが、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と言った。マタイ伝に書いてある。十字架上の七言の一つです。もう一つはさつき、
「彼らは為すところを知らず。赦し給え」

と、十字架上のキリストが自分を十字架にかけたやつのために赦しを神さまに願っているわけだ。世の中は、割れきれないことがたくさんあるよ。涙を流し、地上では誤解され、あるいは迫害された。ことに封建時代にはそういうのがたくさんあった。それで、何ともならないで死んでいった人の血が叫ぶ。その血の叫びは空しく虚空に消えてしまった。そういうような人たちを代表して、キリストは

「何ぞ我を棄て給いし」

ということを抑ったともいえる。

そのことよって、この義を人に与えることになった。与える義になった。それを恩恵という。絶対恩寵というものは、そのような義を与える。神さまとの関係をはつきり——ただ関係ばかりではないよ、またあとで言うけれども——それをはつきり与えてくださったのが、このキリストの叫びです。

「なんぞ、棄て給いし」

と、

「彼らを赦し給え」

というのは、これは義と愛の叫びなんです。義と愛の叫び。十字架上のこの二つの言葉は非常に大事です。自分の生命を棄てつつあるところのキリストが、

「彼らを赦してやってくれ」

と。ということとは、

「この死をもって贖う」

ということですよ。

「なぜ、私をお棄てになったか」

というのは、

「この天地を貫く義が崩れてたまるか」

ということ。しかし、

「この義は人に与えられる義である。棄てられたことは、人に義を与えることになった」

と。この二つの言葉は絶対に忘れてはいかんどころではない。私たちの魂の中に打ち込んでおかなくては。



そういう十字架を前提としないでは、復活の話はできない。それで、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、みんなこの十字架・復活のことは書いてある。どうぞ、ゆつくり読んでください。私はこないだ山へ行って三日間、自然に囲まれて、この福音書の終りの方を全部読んできた。マルコ伝は始めから終りまで読んでしまった。

私はありがたいね。学校を辞めてしまったから、聖書を読むと、読み方がやっぱり違ってきたね、しみ込み方が。何かもう文字が文字ではないんだ。ここは本当の学校ですよ。しかし、二人か三人の生徒から手紙がきた。

「先生がいなくなつて寂しい」

と。それは朝礼を本当に聞いていた生徒です。読めば分かります。

●出現世

それで、復活の前提となることもう一つある。それは、ルカ伝9章を開いてください。

「²⁸これらの言をいい給いしのち八日ばかり過ぎて、ペテロ、ヨハネ、ヤコブを率^ひきつれ、

「ペテロ、ヨハネ、ヤコブ」、これは三人の一番弟子だ。ヨハネとヤコブは兄弟です。

祈らんとて山に登り給う。²⁹かくて祈り給うほどに、御顔の状^{さま}かわり、其の

衣白くなりて輝けり。

と。どういうことですか、これは。参つてしまふでしょ。霊的波動で、キリストの衣が何であろうと、全部これが光に変わつてしまふ。

³⁰視よ、二人の人ありてイエスと共に語る。これはモーセとエリヤとにて、

モーセとエリヤは何百年も前の人間だ。それが現れてきた。天界で生きているからね。モーセはイスラエル宗教の土台をつくつた人です。出エジプトをやつた人。もちろん、神さまの力だよ。エリヤは中興の祖で、イスラエルが信仰的な危機のときに独り立つて、

「エホバの信仰に立ち返れ」

と、もろもろの偶像を拜んでいる連中に対して、偽りの預言者たちに対して独りで戦つて、彼は勝つた。霊的に勝利した。このモーセとエリヤが現れた。

³¹栄光のうちに現れ、イエスのエルサレムにて遂げんとする逝去のことを言

いいたるなり。」(ルカ9・28～31)

ここに「逝去」と書いてあるね。口語訳聖書には「最後」と書いてある。「逝去」でも「最後」でもこれは困つたもんだね。これはギリシア語では、「エクソドス」と書いてある。出エジプトのことを「エクソドス」という。

「エック・ホドス」「道から出る」

という意味です。「の中から出る」のが「エック」なんです。「アポ」というのは「そこから逃がれる」ということ。道から出ることを語つた。



「彼の出現世を、現世を出ることを語った」

ということですが。これは「最後」とか「終焉」とか、そんな訳ではダメなんだ。キリストはこの世の終りでもっておしまいにならない。十字架を通ってこの世から出ていく。

「我は道なり」

とキリストは言った。「私は道だ」と。キリストの道の究極は十字架なんです。キリストの地上の道の究極は十字架です。贖いを遂げ、人々を救うんだから。我々を救ってくれるその最後がこの十字架ですから。

「十字架という道を通っていくことを語った」

ということですが。そういう解釈をしている人がいるかどうか知らんけれども。これが本当なんです。

イスラエルの民は「出エジプト」であり、我々はキリストの十字架によって出、旧人である。旧き人から出てしまう。出、アダム、です。第二のアダムになる。「第二のアダム」ということはパウロがちやんと語っている。生まれつきの我々は「第一のアダム」で、キリストに救われると今度は第二のアダムになる。今度は、滅びないアダムになる。「出アダム」なんだ。だから、第二の誕生日は、あなた方が霊的に救われた時がこの第二の誕生日なんだ。

「1979年4月15日に私は第二の誕生を迎えました」

と言って帰ってください、今日は。

これが「エクソドス」です。そういう、道から出ることを語った。即ち、この世の道から出ることを語った。キリスト自身の最後の道の究極から出ていく。あるいは、「道を通る」と言ってもいい。これはよけないんです。キリストは十字架をよけない。

「私は本当はそんな十字架にはかかりたくありません。お父さん、あなたのところ

へ、もういきなり行きたいんです」

とキリストは言ったんだよ、正直、ゲッセマネで。

「この苦杯を飲ませないでください。けれども、私のそういったお願いではありません。あなたの御意を成してください」

「お前は十字架にかかれ」

と、御意はそう来た。

「人を贖え。お前は旧約聖書を全部完成しろ。旧約聖書の預言は、お前の十字架の死を預言している」

と。イザヤ書53章がそれなんです。旧約聖書のイザヤ書53章がキリストのこの贖いの死のことを預言している。キリストはイザヤ書を愛読しました。

「これは私のことを言っている」

と彼はもうちゃんと自覚していた。

「旧約聖書は我につきて証しするなり」



と、キリストは言った。全部、キリストへの預言なんです。ところが、ユダヤ人はどうですか。今でもあいかわらず、イエスをキリスト即ち救い主としては受けとらない。預言者の一人くらいにしか思っていない。ユダヤ人というのは頑固だからね。それで嫌われるんですよ。一番頑固のパウロがひっくり返ったじゃないですか。

「お前たちのチャンピオンのパウロがひっくり返ったのに、お前たちはなぜキリスト教に、福音に、キリストを本当に受けとることに変わらないか」

と、イスラエルに言いたいわけだよ。

● 霊体をもって現れた

それが即ち、ルカ伝の「変貌の山」。姿が変わったこの変貌の山において、モーセとエリヤがこのイエスの「この世を出る、道から出て天界に往く」ことについて語ったという。「終り」「テロス」なんて書いてない。「エクソドス」と書いてある。そういうわけで、それが非常に大事なわけです。

同じことを別なところで、ヘブル書で語っている。ヘブル書5章の

「⁵斯くの如くキリストも己を崇めて自ら大祭司となり給わず。之に向かい

『なんじは我が子なり、われ今日なんじを生めり』と語り給いし者、

これは詩篇の2篇に書いてある。

これを立てたり。⁶また他の篇に『なんじは永遠にメルキゼデクの位に等し

き祭司たり』と言ひ給えるが如し。

これは詩篇56篇です。その次、

⁷キリストは肉体にて在ししとき、大いなる叫びと涙をもて、

ゲッセマネの祈りのことです。

己を死より救い得る者に祈と願とを献げ、その恭敬によりて聴かれ給えり。」

(ヘブル5・5〜7)

この「己を死より救う」ということは、「死の中から救う」という意味です。死を避けて救うのではない。十字架の死の中から救うところの神さまでです。そういう言葉ですから。ここにやっぱ「エック」が使っている。

それで、どうですか。キリストはそのように甦ったって、もとの肉体に返ったのではない。これは霊体なんです。霊体だけでも、まるで肉体みたいな霊体だね。今のルカ伝のところに書いてあったでしょ。お魚を食べてしまったんだからね。

「お前たちは、私を幽霊みたいに見るが、私の手と足を見る。何か食べるものがあるか」

と。そしたら、お魚があったから、キリストにやったら、キリストは食べてしまった。こんな話は、普通の人はみんな、いわゆる話だと思っている。



「おもしろく書いたな」と。ところが、これはそうじゃない。

このキリストが霊体をもって現れて、また霊界に往ってしまう。もう自由自在ですから。戸が閉じていたって、入ってくるんだから。他の福音書に書いてあるよ。みんなびっくりしてしまった。もう普通の自然科学では分かんずる。

「科学的に証明できないものは真理でない」

なんて、冗談言うなと。人間の科学には限界がある。これはアインシュタインでも、偉大な物理学者でもみんなその点はちゃんと知ってます。ゲーテもちゃんと知っている。

そういう、驚くべき現実です。聖書の現実には、お魚二つとパン五つで五千人に食べさせてしまったではないですか。キリストがそれを裂いて祈れば、五千人の人がみんなお腹が一杯になって、なお十二のかごに余ったと書いてある。そんなことを聖書の中にお伽話みたいに書けますか、本当でなくて。四千人のこともある。四千や五千じゃないです、キリストは。限りなき人たちに地の涯までも世の末までもなされる。とにかく、聖書の現実というのはとてもケタはずれの現実ですから。だから、

「降参しなさい」

と言う。降参したら、そういう質の中に入ってきますから。

皆さん、もつと、魂が自由にならなくてはいいんですよ。何か、「信仰」というと、狭い何かこだわったようなものかと思う。そうではない。これくらい大きなものはない。私は宇宙を散歩するような気持です。あんな飛行機に乗らなくなつていいよ。

今、へブル書のところで読んだように、みなその中からです。相対的なそんな滅びゆくものの中から、今度は絶対的な滅びざるものの中へと行く。中から中へと行く。この「中へ」とをしなかったならば、復活のキリスト、復活の生命なんて言つたつて、これはただ口で言っているだけの話だ。そんなことではダメだよ、あなた方。中へと入っていく。今度は逆に、向こうから私たちの中へと入ってください。どっちでもいいよ。パウロが

「われキリストの中に、キリストわが中に」

と言うが、あれは三格の形で状態を言っている。今私が言っているのは四格の形で、働きかけている事態を言っている。「イン」(の中に)でなくて、「ヒナイン」(の中へ)です。「中へ」と入っていく。

●十字架の門を通って甦りの生命の中に入る

だから、いいですか、十字架で贖われたんでしょ。もう何も心配いらなんです、あるがままで。何か整える必要はない。ポーズはいらない。

「私はまだどうも頑固な人間で困ります」

と。そうでしょう。



「私は分裂していて困ります」
「そうですよ。」

「私は気が弱くて困ります」

「そうですね。何でもいいよ。そんなことは心配いらなから。私なんかさんざんダメな野郎だ。それで、それをそのままキリストの中に入れる、その門が即ち十字架なんです。」

「我は門なり」

「というこの十字架の門を通って、無条件に入っていく。グツと。そうしたら、キリストの永遠の生命、甦りの生命の中に入る。そこは、生命の質は何かというところ、聖霊なんです。そこが聖霊が充満している世界なんです。中へ入ると、聖霊が入ってしまう。十字架の下にぶつ倒れていると、今度は、キリストが入ってきてくださる。」

「私は入れません。もうしようがない。ぶつ倒れてます」

「すると今度は、キリストが入ってくるよ、中へと。だから、

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

「ということは、

「われキリストの中へ、キリストわが中へ、わがうちに来たり給う」

と。これはみな、その通路は十字架なんです。だから、

「十字架抜きに聖霊のことは言えませんが」

「と私ははつきり言っている。よく、霊的な人がただ霊的な祈りをして、何か恍惚状態になつてどうのこうのと。ダメだよ、それは。十字架という事態を通らなかつたら、本当の福音でなくなる。いいね。これははつきりしてくださいよ。」

「この十字架と聖霊の事態の離すことのできない関係をはつきり言わないんだよ、普通の牧師さんだか神学者だかしらんけれども。私が育つた無教会は、

「十字架、十字架」

「と言うけれども、ちつとも中へ入ってこない。」

「それは少し行き過ぎの神秘主義だ」

「なんて。では、パウロはどうしてくれるんですか。」

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

「と言うパウロはどうしてくれるんですか。」

「パウロさん、パウロさん」と言いながらどこを読んでいるんですか」

「と言いたくなる。私はある人の「聖霊論」を読んだら、もう嫌になつてしまったよ。本当にキリストの中へ入ることを非常に警戒している。それはただこっち側から信することみたいなの、「アルス オプ」「アズ イフ」「かの如き」信仰です。それではダメですよ。」

「だから、今言ったように、十字架を通じて、キリストが行かれた。今度は、私たちを中へと入れる事態になつた。ここに甦りの生命の事態が本当に来るんです。その実質は聖霊で



すから。聖霊のバプテスマの中に入ることです。復活節もペンテコステと同じことなんだ。もうじき、50日たつとペンテコステ、聖霊降臨というのが来るけれども。キリスト教で、クリスマスと復活節と聖霊降臨節、この三つは離すことができない。クリスチャン自身にとって一番究極的に大事なものは実はペンテコステなんです。甦りのキリストのことだけを語っていたって何もならん。甦りのキリストの中に私たちが甦らなかつたらどうにもならん。

●私の中にキリストは生きてごらる

ゲーテの『ファウスト』の始めの方を読んでごらん。ファウストは

「いろんなことを研究したけれども、結局、自分は何も分からなかったことが分かった」

というようなことで、もうどうにもならんと。

「ああ、この愚かなる我」

なんて言ってる。それで、仕方がないから今度は魔術で何かをしようかと思ってみたりね。でも結局、行き詰まってしまって、自殺しそうになった。毒杯を飲もうとした瞬間に、復活の歌を歌っている子どもたちの声を聞いて、小さい時のことを思い出して、飲むことを思い止まったということが書いてある。その歌っている歌が、

「キリストは甦りたもつた、

朽ちゆくところの懐の中から。

ということはこの大地、現世から。

喜ばしくお前たち自身を

罪のきずなから引き裂きなさい。

行為をもって彼をほめ讃える者に

愛を証しする者に

兄弟のように困っている人に食べ物を与える人たちに

伝道しながら旅をする人たちに

喜びを約束する人たちに

そついったあなた方に

主キリストは近くあり給つ。

彼キリストはあなた方の所にいるぞ。」

と、そういう詩です。即ち、

「一切の自分の在り方をもってキリストを証しする者にこそキリストはいる」

と。その証しする者はいろいろな方法をもって。その証しする力はどこから来るかというと、それが聖霊なんです。御霊の力です。御霊はいろいろなことに活動し始める。勉強であろうと何であろうと。台所の仕事であろうと何であろうと。お医者さんであろうと、会社で



あろうと、先生であろうと。とにかく、何をしたいようが、その中心に聖霊があると、その人を通して本当に神の栄光が現れてくる。そのようなキリストの生命です。

さきほど、司会者が聖書を読んでいるのを、じつと私は目をつぶって聴いていた。人が本を読んでいるのを聞きながら、同じ本を読んでも、それは悪くはないよ。けれども、じつと目をつぶって聴くのが非常にいい。グーツとその中に入っていていってしまう。文字に囚われなくなるからね。あなた方自身がいまには、

「もう聖書は要りません。私の中にみんな生きています」

ということにならなくては。どうせ、天国に往くときには、聖書を持っていくわけにはいかんよ。

「まあ、聖書だけは持つていきたいな」

なんて言ったってダメなんだ。棺桶の中に入れたって、焼けてしまうから。

「焼けてもいいですよ。私の中に聖書の活字が本当に生きてますよ」

と。活字だもの。自分が即ち活字です。我こそ活ける文字なりと。

「汝らはキリストの書なり」

とパウロが言ったではないですか。

どうですか、楽しいでしょ、福音の世界は。お説教ではないでしょ。お説教を言っても、もつともらしいことを言ったって何もならんよ。

まあ、とにかく、キリストの生命は驚くべき霊生をもっている。地上にあった肉体のキリストはまだ弱かった。いつも、罪との戦いがあった。とうとう、それは勝ったけれども、彼は。我々と同じ弱さを持っていただけでも、とうとう勝ってしまった。今度は、復活した彼は、驚くべき霊体の彼は、何事もこれを防ぐわけにいかん。原子爆弾もどうにもならん。そういう生命の中に私たちは入れるんです、質的に。それは十字架を通過して十字架を本当に受ければ、キリストの霊が入ってくるから。

「はい、私の中にキリストは生きてござる」

ということになる。

「汝、今日我と共にパラダイスにあり」

ということは、

「われ汝のうちにある。それが故に私はお前と一緒にだ」ということです。「一緒」の奥は「中」という言葉なんだ。

キリストの生命の中に入ったら、こんな楽しいことはない。何もいらん。無尽蔵の世界ですから。無即無限無量、無尽蔵の世界。イエス自身がそうであった。私たちもキリストの中にあるとそういうことになりますから。では、おわりませう。

